

現代日本社会にみられるスピリチュアリティの
意義と展開
ードラマを中心にー

Dr. Amal Refaat Youssef
専任講師
日本語日本文学科
人文学部.カイロ大学

**Significance and development of spirituality in modern
Japanese society**

-Focusing on Japanese drama-

Dr . Amal Refaat Youssef

Cairo University, Cairo, Egypt.

Abstract in English:

This study is an attempt to explore the significance and development of spirituality image in Japanese society , which seems to play an important alternative role instead of religion.

through analyzing recent Japanese dramas. We will try to clarify the Japanese point of view towards religion and spiritual views. In other words, the Japanese on one hand don't know clearly the difference between shrines temples ,and do not believe in a particular religion, but on the other hand can be said that they are very interested in what is called "good death." Until the Edo period,

Japan had a mixture believes between Buddhism Shintoism, Confucianism etc.,. Whether it was a god or a Buddha, the idea of becoming a god after death was pervasive for the Japanese. In the Meiji era, the concept of "view of life and death" itself was born, but modernization personalized people, and as a result, death also jumped out of the sense of community and was introspected within the individual. In Japan, death is still perceived as personal and lonely, but it seems that the community ancestral view of "ancestors" remains at the root. In recent years, many houses have no

"Buddhist altars" or "Kami dana". Also the ancestral worship rituals of the past are fading. Instead of that retreating from such traditional religious rituals, non-aromatherapy, healing music, healing art, retreat, meditation, glyph care, and spiritual care have emerged and strongly exists in there daily life . It is a daily production and a "healing" experience. In Japanese society, it seems that there is a growing tendency toward spiritual things such as "healing" and "peace of mind" by finding positive value in "invisible things". One of the backgrounds seems to be closely related to the fact that many people have lost their purpose to live since the end of the postwar economic growth period and the collapse of the bubble economy in the early 1990s. In parallel with this, numerous dramas produced since 2001 reflected spiritual evolution and spiritual growth. I think that such a trend drama has a great influence on releasing the Japanese spirit from daily and material stress. It is said that as humans evolve, they move from magic or shamanism to religion, and from nature worship, polytheism to monotheism. However, it remains unclear why trendy dramas dealing with magic and the like have become popular in the modern age of advanced science, and what is the driving force behind today's spiritual boom. This paper takes up and explains the important trendy drama "Ame to Yume no ato" produced in 2005, explores the reason why spirituality became a social phenomenon, and clarifies the view of life and death seen there.

Keywords: spirituality, religion

الروحانيات وتطورها في المجتمع الياباني الحديث - بالتركيز على الدراما اليابانية - د. أمل رفعت يوسف

قسم اللغة اليابانية، كلية الآداب، جامعة القاهرة، القاهرة، مصر.

الملخص باللغة العربية:

تناقش هذه الدراسة من خلال العرض والتحليل أهمية الروحانيات وتطورها في المجتمع الياباني الحديث، والتي يتصور أن تلك الروحانيات تمثل دوراً بديلاً للدين في المجتمع الياباني، من خلال تحليل عمل من الأعمال الدرامية اليابانية الحديثة. سنحاول توضيح وجهة النظر اليابانية تجاه الدين وما يصاحبها من تصورات لعالم ما بعد الموت. في محاولة لشرح المعتقدات اليابانية الحديثة وروافدها، لتعميق التفاهم المتبادل بين اليابان والعرب.

يتكون البحث من ثلاث فصول وخاتمة في الفصل الأول يتناول تاريخياً معنى وتطور فكرة الروحانيات والحياه والموت وما بعده. لنكشف المعتقدات المختلفة لليابانيين وصولاً لعدم الإيمان بدين بعينه، ووجود مزيج متجانس بين المعتقدات البوذية والشنتوية والكونفوشيوسية وغيرها. ثم عرضنا في البحث اهتمام اليابانيين بما يسمى "الموت الصالح". "ورواج فكرة تحول الانسان ليصبح إلهاً بعد الموت". وفي حقبة مييجي، وُلد مفهوم آخر مرتبط بالبوذية "الرؤية الحياه والموت"، ونتيجة لذلك، قفز مفهوم الموت، ليتخذ الأسلاف وعبادتهم شكل من أشكال الاحتفال. في الفصل الثاني نتناول بالتحليل السنوات الأخيرة، التي اختفى في العديد من المنازل "المذابح البوذية" أو "الكامي دانا". كذلك تلاشي طقوس عبادة الأجداد التي كانت منتشرة في الماضي. بدلاً من هذا التراجع عن مثل هذه الطقوس الدينية التقليدية، يبدو أن هناك ميلاً متزايداً نحو الأشياء الروحية ظهرت على الساحة الاجتماعية مثل "الموسيقى العلاجية" و"فن الشفاء" والتأمل والرعاية الرمزية والرعاية الروحية وهي موجودة بقوة في الحياه اليومية لليابانيين في وقتنا الحالي. لإيجاد قيمة إيجابية في "الأشياء غير المرئية".

في الفصل الثالث نحلل "AME TO YUME NO ATO" وهو عمل من الأعمال الدرامية التي بدأ إنتاجها بكثرة منذ عام ٢٠٠١، والتي تعكس التطور والنمو الروحي. وتحرير الروح اليابانية من ضغوط الحياه اليومية والمادية، وفي الخاتمة نكشف سبب تحول الروحانية إلى ظاهرة اجتماعية في عصر العلم الحديث، موضحة رؤية الحياه والموت، كقوة دافعة لعالم اليوم.

الكلمات المفتاحية: الروحانية، دين.

現代日本社会にみられるスピリチュアリティの 意義と展開 — ドラマを中心に —

〈論文要旨〉

本論の狙いは、近年の日本のドラマを通じて、宗教の代替的役割を果たしていると思われる、スピリチュアリティの意義と展開を探究することである。それによって、一般的には無宗教とも言われている日本人の宗教観及び形而上的なものの見方を解明したい。つまり、日本人は特定の宗教を信じないとされているが、「よき死」には大いに関心があると言えるのではないか。

江戸時代までの日本は神仏混交であり、神社と寺院の違いさえ明確ではなかった。神であれ、仏であれ、日本人にとって死後は神になるという考え方が浸透していた。明治になって「死生観」という概念自体が生まれたが、それは近代化によって人々が個人化し、それによって死も共同体的な感覚から飛び出して、個人の中に内省化された。日本では現代も、死は個人的なもの、孤独なものとして受け止められているが、根底には、「ご先祖さま」という共同体的祖霊観が残っていると思われる。

近年は、仏壇や神棚がない家も少なくない。かつてのような祖先崇拜的な儀礼も薄れつつある。そうした伝統的な宗教儀礼が後退する代わりに登場したのが、「アロマセラピー」や「ヒーリング・ミュージック」、「ヒーリングアート」、「リトリート」、「瞑想」、「グリフケア」、「スピリチュアルケア」といった非日常的な演出であり、「癒し」の体験である。日本社会で、「目に見えないもの」に積極的な価値を見出し、「癒し」や「心の安らぎ」というスピリチュアル的なものに対する志向性が強まっているように見受けられる。

背景の一つは、戦後の経済成長期が終わり、1990年代初めにバブル経済が崩壊して以降、多くの人々が生きる目的を喪失したことと深い関係があると思われる。それと並行する形で、2001年以

降に製作されていた数多くのドラマに、霊的な進化また霊的な成長が反映された。そうしたトレンドドラマが、日常的、物質的なストレスから日本人の精神を解放した影響は大きいのではないか。人間は進化にともなって、呪術またはシャーマニズムから宗教へ進み、自然崇拜、多神教から一神教に進化すると指摘している。しかし、なぜ科学が進歩した現代では、呪術などを扱ったトレンドドラマが流行することになったのか、今日のスピリチュアルブームを支える原動力は何か、こうした点は未解明のままである。

本論は、2005年に製作された重要なトレンドドラマである「雨と夢の後」を取り上げて解説しながら、スピリチャリティが社会現象となったきっかけを探り、そこに見られる死生観を明らかにしたい。

キーワード：スピリチュアリティ、宗教

本論は、五つの部分からなり立っている。

まず、序論には、スピリチュアリティの意義を明らかにする。そのあと、「雨と夢の後に」というドラマのあらすじと背景を説明する。次にドラマにみられるスピリチュアリティの定義と範囲をあきらかにする。その後、「スピリチュアリティ」の概念が提示され、神道・密教などの伝統的な信仰における死後の捉え方、新宗教とスピリチュアリティとの関係を探ってみる。最後に論文のまとめ

序論

学説に現れたスピリチュアリティの意義

本論で論じるスピリチュアリティの定義は分野によって異なり、場合によって互いに矛盾もみられる。それで、まずその意義を明らかにする必要があると思われる。最近、アニメ、ドラマ、映画、医療やターミナルケアと関連づけすることも多くある。宗教学者の島藺進は「宗教」は各人の事柄であるとともに外部にあるシステムをさすのに対して、スピリチュアリティは主に個人の内部において、あるいは個人を通して見いだされるものスピリチュアリティはこの意味で心理学と関連が深いと述べている。また、

哲学者・教育学者の西平直は、スピリチュアリティには宗教性、価値観性、実存性、大いなる受動性の4つの位相を区別することができるとしている。その四つの位相は「雨と夢の後」というドラマにも表れていると考えられる。近現代以前日本社会は救済宗教の影響下があつて近代化が進み、やがて日本社会が変化し、民衆と伴って救済宗教からスピリチュアリティに向かつてきた。そして、すでに伝統的な神道、陰陽道、仏教など、どういう形でドラマに生かされてきていることがある。

スピリチュアリティは以下の9つの要素から成る多元的構成体として再定義し、それぞれの要素を測定するための尺度を開発している。

1. 超越的次元の存在：超越的次元、すなわち何かしら「見えない世界」の存在を信じ、それとつながることで力を得ていると感じる。
2. 人生の意味と目的：人生には意味があり、存在には目的があると確信している。
3. 人生における使命：生への責任、天命、果たすべき使命があると感じる。
4. 生命の神聖さ：生命は神聖であると感じ、畏怖の念を抱く。
5. 物質的価値：金銭や財産を最大の満足とは考えない。
6. 愛他主義：誰もが同じ人間であると思い、他人に対する愛他的な感情を持つ。
7. 理想主義：高い理想を持ち、その実現のために努力する。
8. 悲劇の自覚：人間存在の悲劇的現実（苦痛、災害、病気、死など）を自覚している。そのことが逆に生きる喜び、感謝、価値を高める。

- 9.スピリチュアリティの効果:スピリチュアリティは生活の中に結実するもので、自己、他者、自然、生命、何かしら至高なる存在などとその個人との関係に影響を与える。

この定義は、スピリチュアリティは宗教的活動として顕在するのではなく、幅広い領域での生活経験に潜在的な影響を与えるもの、すなわち価値観 (value として捉えている。宗教的な底面から考えると、宗教学事典の「スピリチュアリティ」項目(弓山達也)では、WHOの定義は1998年以來の議論でスピリチュアリティと宗教とは分離された次元で議論されたが、一方でまた靈的なもの・超自然的な働きを重視する宗教学者らによる定義として、スピリチュアリティを、「超自然的な力や存在」のこと(小池靖)、「当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在」または「神秘的なつながり」(伊藤雅之)、「何らかの超越的存在」(葛西賢太)という定義がある。

同事典で岩井洋は黒住教、金光教、天理教などの新宗教が組織的であるのに対して「超越的、神秘的な体験を重視する個人的な宗教性」として「靈性(スピリチュアリティ)」を定義した。

同事典で鶴岡賀雄は、スピリチュアリティとは「従来の神秘主義が有していたエリート主義、達人主義的含意を去って、一種の民主化ないし大衆化された神秘主義」として定義した^⑨

E. タイラーは1871年『原始文化』で、万事万物というアニミズム的概念について議論している。人間の靈魂の概念をどうえたのかについて、取り上げている。一つは動けなくなった死体と出会って、生命を支えていた何かが死後どうなるのか考えたに違いないという。もう一つは、不在の他者の幻像をみるという経験

で、不在であるにもかかわらず他者が実在すると如実に感じることもある。この二つのきっかけで、死後も死者の霊魂が存在し続けるという信仰が現れているという。人と同じく動物や他の生物にも霊魂があるであろうと予測している（『宗教学 キーワード』 p. 166-167）。

1.1 「雨と夢の後」の位置づけとスピリチュアル背景

（*パーセントはドラマの視聴率を示している）

スピリチュアルな背景もしくは日本の宗教観がみられる映画としては、数多くあり、事例として次のようになる。

1. 宮崎駿の「となりのトトロ」（15回の放送で14.2%、1988年）
2. 「ものけ姫」（9回目の放送で15%、1997年）
3. 「千と千尋神隠し」（最高視聴率は二年ぶり放送され時24.8%2001年）、などがあると思われ、

その時から次々に「陰陽師」（11.3%、2001年）をはじめ、「天国に一番近い男（教師編）」（16.5%、2001年）、「地獄少女」2005年から2009年にかけて第1期～第3期が放送、2017年に第4期が放送されたテレビアニメ（2005年）「地獄少女 二籠」（2006年）、「地獄少女 三鼎」（2008年）「地獄少女 宵伽」（2017）「雨と夢の後（2003年）9.8%」「ゴーストもう一度抱きしめたい（2010年）」「ON 異常犯罪捜査官」「妖怪人間ベム（2011年）15.6%」「山田くんと7人の魔女（6.3%）2013」「ゴーストママ捜査線（2012年、10.7%）」「世にも奇妙な物語」（2017年）」「僕運命の人（2017）」などのオカルトブーム及びスピリチュアル的なドラマが現代日本社会の反映を示されるともなって、新しい文化芽生えたといえる。

以上から、『雨と夢の後』というドラマが視聴者から高く評価されていると理解できる。

スピリチュアル的なドラマおよび映画は以下のように分類することができると思われる。

1. 日本の伝統的な神道および陰陽道と関連するドラマ
2. 仏教的背景のドラマ
3. キリスト教的な背景のドラマ（愛のむきだし）

4. 新宗教つまりスピリチュアル及び「霊」、宇宙、天と地との関連のドラマも数多くある。

5. 密教と仏教混ぜてあるドラマ。

でも、ほとんどのドラマが根強く日本の自然、神々と関連してことが特徴といえる。その数多くのドラマのうち、もっとも「霊」直接とかかわり、「霊」のパターン、そして、日本人の仏教、陰陽道などの伝統的な宗教な見方がはっきりとしていると考えられるのは「雨と夢の後」のである。

1.2 ドラマのあらすじ

『雨と夢の後』は2005年に柳美里によって怪談小説として書かれ、のちに連続ドラマ化されていた。そのドラマの主なストーリーは、二人暮らしをしていた中学生の雨とその父親・朝晴親子が主人公である。朝晴は自らのライフワークとする「コウトウキシタアゲハ」という珍しい蝶の採集ために外出するの採集で度々外出することが多く、ある時、台湾に蝶を捕まえようと出かけた朝晴が、不慮の事故でなくなった人となってしまった。朝晴が亡くなったことを全く気づかずに幽霊として娘雨の家に帰る。しかし、ある日同じマンションに住んでいる隣人・暁子(きょうこ)に自らが幽霊であることを知らされる。もちろん、娘の雨はまだ父である朝晴の死んだことを知らない。雨が幽霊である父朝晴と生活することで、靈感が強くなり、他の幽霊も見えるようになった。そして、10話には、相次いでさまざまなパートナーの霊とかかわっていく。

1.2 描写された地縛霊のパターンと解説

「雨と夢の後」では、続々と描写している幽霊のパターンが地縛霊の事例が多種多様に当てはまるといえる。しかし、どちらも「成仏」できなくて、地縛になった原因もおかれる現状もドラマに幅広くあらわれている。しかし、死んでいても、自分が死んだことを認めず、心がこの世と繋がっている。次にドラマに登場した”地縛霊”をいくつかのケースに分けて考察してみる。

まず、第一話の地縛霊のパターンは警官であり、人々を守りながら犠牲となって殺されていたパターン。第2話では、5年前に学校で事故死した若い中学生の話である。第3話では、自分の死因や家族の記憶がない霊の事例が描写している。その霊が地縛霊、病院にある霊、道端で話しかけられた霊、成仏しない理由も明らかではない。

そして、第4話では、ジャズピアニストの霊はサクソプレイヤーの息子の隣にいなければ、壊れてしまうので、心支えするために際にそばにいる。第5話

留守中の父親が家全焼し自分以外の家族は死んでしまう。全家族が生き残ったお父さんのいる家にしがみつく。お父さんが家族を助けられなかった自分を攻め続け、結局、死んだ家族から許される、成仏できる。

第8話、睡眠薬を過剰摂取して自殺した霊。思い残すないように

第9話ではやっと近所のストリーがことでみんなが員明らかになる。5年前病気で息を引き取った。最後、お父さんの「霊」があり、彼が娘の雨と心が繋がっているので、「成仏」することができなく、ドラマ中には直接かれが地縛霊と触れなかったが、やはり「地縛霊」と理解できる。

ここで、地縛霊の定義及び起源をあきらかにする必要があると思われる。

地縛霊とは、漢字の通り、特定の地・場所から離れられない霊のことで、霊自身が地から「離れたくない」気持ちが強いためその地に縛られているようのである。地縛霊は場合によって地上人に取り憑き、さまざまな問題を引き起こされる。これが憑依現象とよばれるが、憑依現象は地上人にとって実に厄介な問題で、「雨と夢の後」の中にもその事例が見られる。

以上から明らかになったことはロジャークラーク『霊とは何か』の中には、「霊」八つのパターンを解説し、分けられている。

- * エルメンタル
- * ポルターガイスト
- * 伝統的あるいは歴史的な幽霊
- * 精神的な刷り込みの現れ
- * 危機や死に見舞われた者の幼い影
- * タイムスリップ

- * 生き霊
- * 取り憑かれた無機物

ドラマの6つの事例もいずれの場合も、必ずその場所と霊の間になんらかの関係性が存在している。では、その地縛霊の生み出される条件とは何かというと、縛霊には大きく分けて2つのパターンがあります。ひとつは特定の場所に特別な思い入れがあるため、自分の意思でそこを離れようとしなない霊です。その場所とは、自分が苦労して築き上げた家や会社などの財産にかかわる場所であったり、良いも悪いも思い出がこびりついた場所である場合が多く、その場所と場所に付属する物や人を守ろうとしたり、またはそれらの物や人に対する恨みを晴らそうとします。この場合の地縛霊は、自分が死んで霊となっていることを自覚していることが多いのも特徴です。自分の意思で除霊されることを拒み、成仏することを望んでいないこともあります。

もうひとつは突然の死など、自分でも知らないうちにその場所に縛りつけられてしまった霊です。死んだ理由にかかわらず、本人が納得できていなかったり、死を認識できていなかったりする場合、死に至った場所に残る地縛霊となります。彼らは、自分がもう死んでいることはもちろん、そこに縛られている理由も分からず、何度も死の瞬間の苦しみを味わっていたり、助けが来るのを待っていたりします。この霊はこだわる理由が土地ではなく自分の感情であるために、“自縛霊”と呼ばれることもあります。以上のパターンがドラマに登場し、

「心がつながり」「心残り」という形で霊がいて、智晴が見え、経験もした話。体をなくして霊は心だけになった存在。雨に見えた。場所に憑く霊と人につく霊

霊が他の霊を引き寄せる力の経験もあり、最後のシーンは日本の典型的な祖先の崇敬とおなじく、雨はお父さんが死んでも「遠くから見守る」というセルフが村の自然に一人に立ちあつた。それも、日本の自然はあの世を示すため、霊を向かいに雨が立った。

1.2 地縛霊と成仏の起源

日本語の日常会話やドラマ、文学作品などでしばしば用いられている「成仏」という表現は、「さとりを開いて仏陀」になるこ

とではなく、死後に極楽あるいは天国といった安楽な世界に生まれ変わることを指し、「成仏」ができない、ということは、死後もその人の靈魂が現世をさまよっていることを指していることがある。

こうした表現は、日本古来の死生観が仏教に入り込みできなかった、仏教者が死を迎えてのちに仏のいのちに帰ると考えられた信仰を背景として、この国土である娑婆世界から阿弥陀如来が在す西方国土の極楽浄土へ転生する浄土信仰とも相まって生まれたものである。日本の仏教が、本来の仏教から変化・変形している事は、知られている注。「雨と夢の後」では成仏できない「幽霊」ばかりでしたが、日本の文化の中で「成仏」は大乗仏教と関連し、初期大乗仏教が成立すると、現世で直接に阿羅漢果を得ることが難しい在家信者であっても、輪廻を繰り返す中でいつかは釈迦と同様にオリジナルなさとりに到達できる（＝成仏できる）のではないかと考えられ始めた。「成仏」をめざして修行する者を菩薩とよぶが、釈迦が前世に菩薩であった時のように、たゆまない利他行に努めることで、自分もはるかに遠い未来に必ず成仏できる。

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、彼女の日本文化についての著作「菊と刀」の中で、日本人の独特の死後のイメージについて主張をし、生前の行いに従って、極楽と地獄に行き先が分けられる、という（本来の）仏教のアイデア（因果応報）を拒絶した。

1.3 ドラマに描写された成仏：

ドラマに現れている死生観が仏教と強くかかわっていると思われる。『究竟次第』では、気のコントロールを利用して、概念やイメージのない意識状態になり、それを利用して空の智慧を得るとともに、心身を浄化・活性化して実際に成仏（三身の獲得を）します。

朝晴が極楽にある天国へ行かず、現世にさまよって霊として次から次へ娘さんと活動していた概念は仏教と関係がある。ドラマと様々な霊」とかかかわっていること

2.1 陰陽道とオカルト

平安時代から強く陰陽道ブームと関連していることがあり、独特な存在とみられる日本の「靈魂」の文化は、江戸時代であらわれた能の芸術にも描写されていた。その後、現代になると「靈界」的なドラマとして展開してきたといえる。

そして、現代社会に宗教紛争の原因で悪化となった「宗教」イメージが代わりに、スピリチュアル的なドラマの数だけから考察すると、古代以来の原始的な宗教形態である神道が根付いていることが明らかであろう。また「靈」は接触することができ物理的な存在を持つといえる。日本の宗教観その基礎には、自然の見えない世界に対する日本人の靈性観もあり、現代スピリチュアルの行為と結合したといえる。スピリチュアル的価値が今後社会でより大きな役割を果たしていくようになるのではないかと思う。

現在、スピリチュアル的価値と近代宗教価値の関係は、日本では岐路に立っていると考えられる。ただし、無宗教の日本であっても、一神教のわれわれも同じ方向性、つまりオカルト、スピリチュアル世界に入り込んでいることに疑問を持っている。

戦前に発展してきたオカルトがスピリチュアリテイという形で現在社会に浸透し、日本人の精神、宗教観を理解する手がかりの一つとなつて思われている。

スピリチュアリテイドラマが発生する原因も客観的な社会、経済危機そして、ストレスから逃げ道なれるでしょう。特に印象に残ったのはいわゆる天国の思想が定着する前に、日本でも死んだら魂は山に行くという死後の世界が身近にあるという思想があったことだ。これはインディアンやアボリジニの考え方に近い。

3.1 ドラマにみられる神道の影響

1. オカルトとスピリチュアリテイの定義と範囲

1.1 オカルトとは

超心理学（以下オカルト）の歴史が1882年までさかのぼり、ロンドンに心靈研究会という組織が定められ、19世紀終わりに靈媒や靈能者があらわれアメリカ、ヨーロッパでは心靈ブームとなった。そのブームが死んだ交霊から、やがてテレパシーなどの超感覚的知覚なことに展開してきた。

オカルトとはラテン語の occultus、神秘に対する知識という意味（隠されたもの）を語源とする。目で見たり、触れて感じたりすることのできないことを意味する。つまり、心霊現象・UFO・

予知夢・あの世などの現実と怪異が交じり合い生まれる、誰も見たことのない世界なのである。そのような知識の探求とそれによって得られた知識体系は「オカルティズム」と呼ばれている。ただし、何をもち「オカルト」とするのかについては、時代や論者
けんかい
の立場等により見解が異なるようのである。

オカルトのルーツを辿ると十九世紀後半、ロシアの霊媒ブラ
れいばい
しんちがく

ヴァツキー夫人が創始した「神智学」というオカルト的な思想から始まった。

そもそも、この語句がこのような使われ方をする別の理由としては、立場が異なる知識体系の内容はそれがどんなものであれ、
たいいてい

大抵はとりあえず慣れないうちはひどく意味不明であり、まる
えたい

で得体の知れないものを扱っているように感じられることから、“隠されたもの”という語があればその語を用いて非難してしまいたくなるという人間の心理上の事情もある。宗教や信仰の分野においても、そのような原理は働いており、自らの信仰体系とは異なるものは即「オカルト」と呼ぶことにもつながる。

実際、キリスト教が正統派とされていた（あるいは自身でそう自認できた）19世紀のヨーロッパにおいて、いわゆる“正統派キリスト教会”の信仰体系とは異なる信仰体系（異教）が復興してきた時には、それが「オカルト」と呼ばれることになった。

この歴史の影響から「19世紀以降の、正統キリスト教以外の平常の生活から隠された人間の知識を超えた神秘の研究とその結果である神秘主義体系がオカルティズムと呼ばれる」と解されることもある。

現代日本社会の求めているスピリチュアリティが様々な信仰と混ぜ合わせる。死んだ霊があるいは身が見えない精霊が全体日本を見守っている。それは日本人の根底あるいは宗教主に靈魂観、世界観と関連している言葉なのであるが、実際にオカルトが新宗教か

ら小説、映画、ドラマそしてアニメーションなどのサブカルチャーまで幅広く見られる共通の思想である。

1.2 スピリチュアリティとスピリチュアリ体験とは

スピリチュアリティという用語は 1970 年ごろからアメリカ、ヨーロッパそして日本という先進国で既存宗教と対立的な形で現れと島藺が指摘している。また「肉体的 (physical)、精神的 (mental)」という概念から「肉体、精神、霊的 (spiritual)」と幅広く教育や芸術などの社会的に完全な状態を示すようになった。そして、日本では、スピリチュアリティは宗教とかかわっている用語として使われ、「精神世界」から「スピリチュアリティ」に転換していった (島藺)。的なドラマの中に、とても調和的に描写されている「スピリチュアリティの」。

「パワースポット巡り」や「聖地巡礼」と名付けられた旅行は一般誌に特集される。苦しみ人間同士を助け合い、受け継がれる。以上から、現在社会では危険な存在となった宗教の代わり、オカルト・スピリチュアリティという用語が関心を集められるようになった。その神秘的な概念が古くから陰陽道などという形で自然哲学思想として社会に根強くあると考えられる。

中世・近世時代に活躍していた陰陽道・神道そして幕末期に成立した民衆宗教は、今日となって様々な形で「雨と夢の後」みたいなスピリチュアル的なドラマがその一つの代表的に描写され、スピリチュアルと関連しているドラマ、漫画、アニメなどが幅広く取り上げられている。

2. 神道における死後の捉え方と死神の存在は

神道といえば「日本の宗教の根拠」であるといわれているから、ここで、神道とドラマにみられる「霊」のイメージを考察する。神道には「死神」が存在せず、よりも「死」のイメージが二つある。一つは「けがれ」もう一つは「避けられないもの」田氏の「神学的理解」以外に考えられないとして、宣長の 死後黄泉国へ行くという説も不確実と批判。「要するに行くべき他界は、一定していない。しかも同時多在が可能ということ、これが結論なのである」と主張する。おわりに、二つの重要な提言をしている。一つは「御霊がこの中津国に留まるという信仰は、死にゆく者、

残る者達にとって、共に見逃すことが出来ない」。死後、他界のうちどこに行くかを特定せず、しかも心が乱れないのは、このような中津国に留まるという信仰があるからだと強調。もう一つは、「日本人の行う神祭り、祖霊の御魂祭りは、共通な信仰心意によって貫かれており、たとえ死者の祭りと雖も、それは共に在ることの慶びなのである」という。

神道は死者の靈魂は神となり、子孫を見守り、その繁栄をもたらす「産霊」の行為を助けるというのである。江戸時代に外宮の神職を務めた中西直方というものの和歌がある。

ひもと い ますびと

「日の本に生まれ出でにし益人は、神より出でて神になるなり」。

つまり日本に生まれた人々は、神の世界からきて、神の世界へ帰っていく。

これは、神道の死生観をうまく読み込んだものとされる。身近な親族がなくなることは、残されるものの身にとってはたいそう悲しい。しかし、その親族はそれまでよりはるかに幸福な境遇になっている。

そして、自殺を大罪とする一神教に対して、自殺者の靈魂も不慮の事故や犯罪の犠牲になって亡くなったものの靈も、ともにかみになるという。

上田賢治氏の論考「日本神話に見る生と死」

つまり、憎みをもって死ぬ死んだ者が地縛霊になって永遠にたたるという発想は、本来の神道にはない。（その事例は雨と夢もあとに二回描写されている）同じ形で、憑依、鎮魂、神の供養

3. 新宗教とスピリチュアリティとの関係

新宗教の歴史について述べる。様々な意見がある。（幕末維新からという説と20世紀初頭せつもある。多くの教団1850黒住教）（1950年から1960年）

4. スピリチュアリティドラマが発生する原因の考察

本論では、スピリチュアル的なドラマが生まれる要因をシンプルに読み解くならば、二つあると解釈できる。

まず、科学的に発展してきた現代社会は「心の慰め」「癒し」の必要性が表れてきたと考えられる。要するに、科学的物質主義が行き詰まりを迎えつつあり、人々が「心の平安」の獲得へと価値の視点を移そうとしている点があげられる。

もう一つは、それらは以前ならば宗教によって担われていた分野である。しかし、現代の日本では、既存の宗教、とりわけ教団きやく宗教への関心や関わりが希薄になりつつある。難解で、厄介やっかいのような教団宗教の教義にとって代わる、新たな思想、が必要とされているというのが実情だろう。今日では、人々の「癒し」へのニーズは「救済」から「気づきや学びへと移行しつつある。絶対的なものへの「信仰によって「救い」が得られるという公式は、ゆ先の科学的根拠を求められる時代を経たことで大きく揺らいだ。現代の人々は、絶対的なものや「全てを乗り越える力」は「自らの中にある」と気づき、目覚めることが重要だという意識上のトレンドの変化は、今後も加速することになるだろう。

まとめ

以上から日本人のスピリチュアリティの展開を考察することにあたって数多くのスピリチュアル的なドラマから代表的に「雨と夢の後」というドラマを考察してきた。

日本では、宗教の境界が不明、声なき死は一体どんなものだろうかと感じたりもする。ドラマでは、仏教、神道、陰陽道の影響も見られた。

現代人の私たちにとってこうした実存的な死生観は非常に大きな明暗を含んでいるように思う。宗教観をこえて先の見えない死界の心配に対する一つの納得をしていくような方法としてドラマで現れている。日本のドラマによって日常の宗教に対する見方だけではなく、死生観などの展開をみられるといえる。宗教に対する違和感もトラウマもなくなったといえる。現代になって宗教を

控えめにするることによって、スピリチュアルは癒しの措置となった。

ドラマでは宗教観の背景から霊界通信を通じて、これまで人類が知ることのなかった新しい霊的知識を地上にもたらし、その霊的知識によって霊界の事実を知り、真理を知ることになったといえる。また、時代の流れとともに「霊的無知」に対する一つの解決する方法としてドラマに示されたこともあるであろう。

参考文献

1. 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー 単行本 - 1999年
2. 安丸良夫『現代日本思想論——歴史意識とイデオロギー』岩波現代文庫、2012年
3. 安丸良夫『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈』岩波新書黄版、1979年
4. 大田俊寛『現代オカルトの根源霊性進化論の光と闇』ちくま新書、
5. 安丸良夫『日本ナショナリズムの前夜 国民・民衆・宗教』洋泉社新書、2007年
6. 安丸良夫『現代日本思想論』岩波書店、2004年
7. 本山 博『呪術・オカルト、隠された神秘 心の成長と霊の進化の宗教学』名著刊行会、平成元年（1989年）
8. 島藺 進『スピリチュアルティエーの復興 新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007年
9. ロジャークラーク『幽霊とは何か 5百年の歴史から探るその正体』国書刊行会、2016年
10. 渡辺恒夫『オカルト流行の深層社会心理 科学文明の中の生と死』ナカニシヤ、1990
11. 渡辺 勝義『鎮魂祭の研究』名著出版、2003年
12. 山下克明『陰陽道の発見』NHK ブックス、2010年
13. 竹村牧男『日本仏教思想のあゆみ』JP 浄土宗出版、2012年
14. 安蘇谷正彦『「神道の生死観と神道古典」明治聖徳記念学会紀要〔復刊第44号〕平成19年
15. 島藺 進『日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ』(朝日選書、2012年

注

2. P. 3 『千と千尋の神隠し』の平均視聴率が19.6%だったことが25日、わかった(ビデオリサーチ調べ、関東地区)。同19.2%を記録した2012年7月6日以来、2年ぶり7回目の放送で0.4ポイントアップさせるなど人気は健在。10時またぎとなる午後9時56分には最高視聴率24.8%にのぼった。

3. 以下はいくつかのスピリチュアリティの定義を列挙する(順不同)。

- 大阪市立大学医学部看護学科教授の長山正義は、森宏一編『哲学事典』(青木書店)での定義に基づき、「人間に特有な心理的あるいは精神的活動の総体または任意の部分を指す用語」と定義している。
- 神学 スピリチュアルケア研究・実践 窪寺俊之

人生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能。

- 死生学研究 藤井美和

どんな状態でも自分をよしとでき、生きることに根拠を与えるもので、人間存在の根源を支える領域である。これには宗教性が含まれている。